

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# 琉球語首里方言調査に基づく音韻体系と形態分析についての一考察

著者	森 みどり, 梅沢 薫, 大藤 トヨコ, 高村 智子, 黒木 ゆみ, 土屋 智江, Peng Fred C. C.
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	15
ページ	107-137
発行年	1991-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/11964">http://hdl.handle.net/10114/11964</a>

# 琉球語首里方言調査に基づく音韻体系と 形態分析についての一考察

森 みどり、梅沢 薫、大藤トヨコ  
高村 智子、黒木 ゆみ、土屋 智江  
Fred C. C. Peng

## 概 説

我々は1989年度冬学期の Fieldwork in Linguistics を受講したのち、沖縄の首里地方の実地調査へ赴いた。

今回の調査の目的は、まず、我々学生の実地体験調査ということであった。この点、沖縄は日本国内でもあり、共通語も通じるが、その方言は奄美諸島より北の日本語の方言とは大きく異なっており、格好の調査対象といえる。

もうひとつの目的は、琉球語、ひいては Proto-Japanese（日本語祖語）の reconstruction（再構成）である。地理言語学的観点でなく、将来的には史的言語学的観点で分析することを考えると、激しく変式している反面、日本語の古語を残していたり、集落ごとに言語の差が大きく、言語の変化の過程を実際に観察できたりする琉球語は、貴重な言語である。

歴史的に見ると、まず、琉球語が日本語と分れたのは、おそらく3世紀から6世紀の間である（中本正智「琉球方言音韻の研究」より）。その後、島ごとや集落ごとに様々な分化・発展を遂げ、琉球王国がもっとも盛えた15世紀ごろに完成される。16世紀にかけては、『おもろさうし』という琉球の古歌謡集が編纂されている（中本正智 同掲書）。これは古代の琉球語を知るうえで貴重な資料である。さらに、琉球語は、1609年の島津氏（薩摩）による琉球入り<sup>(注1)</sup>、明治時代の廃藩置県<sup>(注2)</sup>、共通語化政策やを経て本土方言の影響を受けながら、現在に至っている。今回、現地（首里）におもむいた印象でも、ほとんどの人が共通語を話すことが出来、特に若い人は、日常会話でも共通語を用いるようだった。

島国だったという地理的特性、集落ごとに交流がほとんどなく発展してきた、というような理由により、琉球語は、その中でもさらに細かな分化を遂げている。その程度は地元のことわざに「水が変われば言葉が変わる」といわれるほどで、甚だしい場合には、ひとつ道を隔てた隣の集落どうしでコミュニケーションをとるのが困難なほどだという。琉球列島全体は50以上の島々からなり、人口は100万以上である。分布面積、人口から見れば本土方言の比ではないのだが、そのバラエティーは本土方言に負けないものがあるというもうなずける次第である。この琉球語を系統別にまとめたのが、図1である。また、それを地理的に表

わしたものが、図2である。

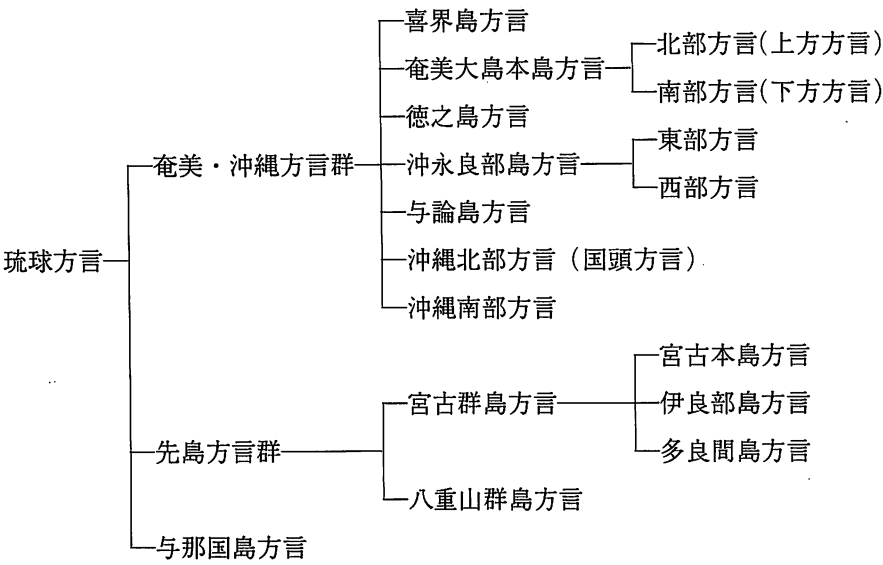


図1. 琉球方言の下位区分  
（『沖縄語辞典』国立国語研究所編による）

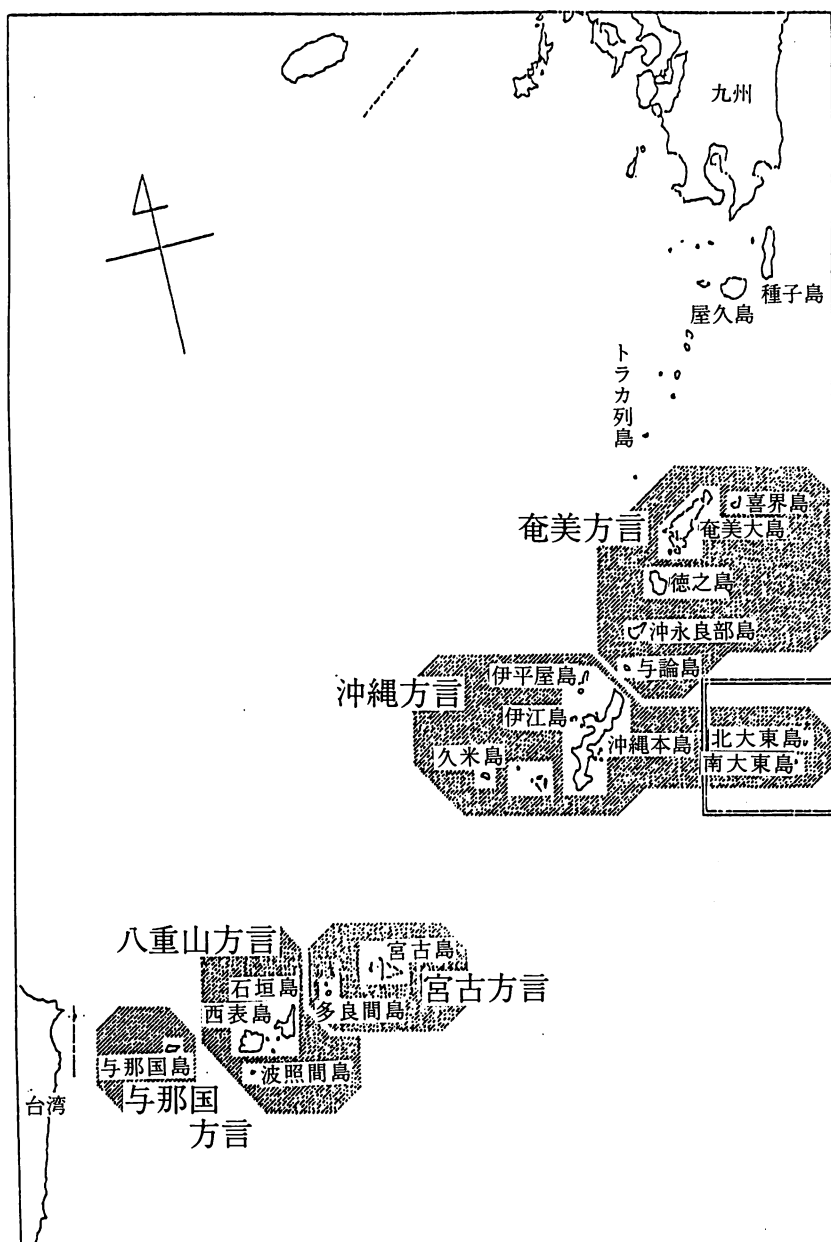


図2. 琉球方言区画図  
 (『琉球方言音韻の研究』中本正智より)

今回調査した首里方言は、図1の沖縄南部方言に位置する。首里が琉球王国時代の城下町であったため、琉球王国の共通語とされ、今でも最も勢力のある方言である。前述の『おもろさうし』、伝統芸能の「組踊り」の戯曲、琉歌から最近のフォークソングや方言ニュースにも首里方言が使われている。首里方言の特長は、身分制度を反映し、王族の言葉（ウドゥン言葉）、士族の言葉、平民の言葉に分かれていたことである。（例1）

例1 相手に対する呼びかけのことば

[ʔya・]	同等の者に対して
[na・]	目上の者に対して
[ʔundzu]	
[nundzu]	さらに身分が上の者に対して
[myundzu]	

つぎに我々の調査の詳細を記す。日程は1989年3月8日から14日の6日間で、調査を行ったのは、実質5日間であった。メンバーは、Fieldwork in Linguistics 受講者から8名、引率指導のパン教授を加え、総員9名であった。インフォーマントには東京都立大学の中本正智先生、沖縄県立芸術大学の加治工真市先生、琉球大学の名嘉真三成先生のご紹介により10名の協力者が得られた<sup>(注3)</sup>。10名とも方言に対する関心が深く、記憶が比較的確かな方々で、特に自分でも琉球語の研究を行っておられる方、琉球語の保護・発展の為に尽力されている方、もおられた。調査方法は、個人に任されるところが大きかったが、大体、少人数での対話形式で、テープレコーダーとノートを併用した。8名の学生のうち今回共同作業を行ったのは6名で、2名ずつ3つのグループにわかれ、①音韻②動詞の形態③形容詞の形態、を中心に調査研究を行った。分析に際しては、互いに資料を提供しあった。また、分析の方法については、structural linguistics（構造言語学）の手法を用いたが、ところどころ国語学の手法や知識を用いた。将来的には systemic linguistics（系列言語学）を応用して分析するとよい結果が得られることと思う。

## 1. 音 韻

### 1. 1. 音韻について

#### 1. 1. 1 分析①

音韻分析をするにあたり、まず単語300語をカセットテープに収録し、カード一枚につき一語の割合で書き出した<sup>(注4)</sup>。

Phones（音）から phoneme（音素）を導き出すに際し、初めに、資料から minimal pairs（最少対立の対）あるいは analogous pairs（類似対立の対）があるか否かを観察した。そこから、対立関係にある phones、すなわち phonemes を導き出すことが出来るわけである。例

えば、下の例①を見てみると、[čimpe・sun]と[sambe・]において[p]と[b]は共に、すぐ前に[m]、すぐ後に[e・]を伴っている。すなわち、その他の環境は異なるので完全な minimal pair とは言えないが、少なくともすぐ前と後すぐ後は同じ環境なので analogous pair である。従って[p]と[b]は別個の phonemes であると推測される。同様に例②も[t]と[b]の analogous pair から、それぞれが単独の phonemes であると推測される。例③を見てみると、[kusu]と[gusu]では共に、/ʃ-usu/という同じ環境に、また、[kungo・]と[gungo・]では、/ʃ-ungo・/という同じ環境に[k]と[g]がそれぞれ現われている。つまり、[k]と[g]は minimal pair を持っているので、別個の phonemes である。例④以下も同様にして phonemes を導き出したものである。

(首里方言において観察された minimal pairs、analogous pairs)

例①

{ [p]: [čimpe・sun] (唾を吐く)  
[b]: [sambe・] (3倍)

例②

{ [t]: [ʔutida] (「太陽」の敬い言葉)  
[d]: [ʔudi] (腕)

例③

{ [k]: [kusu] (9升) [kungo・] (9合)  
[g]: [gusu] (5升) [gungo・] (5合)

例④

{ [ʃ]: [ʔaʃibu] (あせも)  
[ʒ]: [kaʒimaya・] (97才のお祝い、風車)

例⑤

[ts]: [empitsugwa・] (小さい鉛筆)  
[dz]: [ʔndziča・biɾa] (行ってきます)  
[ʔusadzi] (うさぎ)  
[pidzi] (ひじ)  
[pi・dzinto・] (ひじ)  
[ʔadzi] (味)

例⑥

[č]: [hačika] (20日) [denču・] (電柱)  
[ʃ]: [waʃiwaʃi] (怒る様子) [kunʃu・] (90)

## 例⑦(a)

[ m ] : [ mumu ] (脚のもも)    [ ʔami ] (雨)  
 [ n ] : [ nunu ] (布)    [ ʔnagani ] (背中の筋肉)  
           [ mimi ] (耳)    [ čim*i* ] (つめ)  
           [ nimin ] (2 令カイコ)    [ šin*i* ] (むこうずね)

## 例⑦(b)

[ 5 ] : [ ʔmma · ] (馬)  
 [ m ] : [ nimme · ] (2 枚)    [ sambe · ] (3 倍)  
           [ empitsugwa · ] (小さい鉛筆)  
 [ ʎ ] : [ ʔnči ] (「手」の敬い言葉)  
           [ ncagiri ] (丹前)  
 [ n ] : [ kansui ] (かみそり)  
           [ genno · ] (げんのう)  
           [ ʔunšira · še · bi ] (おいしかったです)  
           [ kunju · ] (90)  
           [ pi · san ] (寒い)  
 [ ŋ ] : [ čiŋkwa · ] (かぼちゃ)  
           [ saŋgo · ] (3 合)  
           [ kamuŋ ] (食べる) (注5)(注6)

## 例⑧

{ [ s ] : [ sudi ] (袖)    [ kusa ] (草)  
   [ š ] : [ šidi · n ] (いただく)    [ kuši ] (腰)  
   { [ pi · ča · sun ] (火を消す)  
     [ ʔunsira · še · bi ] (おいしかったです)

表 1 (分布)

[ s ] :	sa su	sa · so ·
[ š ] :	ši še	šo ši · še ·

## ➡サ行

<日本語東京方言> sa ši su 

se
----

 so  
 <琉球語首里方言> sa ši su 

še
----

 so

日本語では、サ行は sa、ši、su、se、so となっていて、後ろに high – front vowel の [ i ] がきた時、[ s ] は、palatalization (口蓋化) をおこして [ š ] になる。つまり、[ s ] と [ š ] は

allophones (異音) なのである。ところが、首里方言においては、資料の中には[ se ]という音は見あたらない。そして[ s ]に midfront vowel [ e ]が続く場合、必ず[ se ]という様に、palatalization がおこっている。このことから、首里方言では allophone [ s̺ ]の分布が一つ増えて、[ i ]の前と[ e ]の前に現れると考えられる<sup>(注7)(注8)</sup>。

## 例⑨

{ [ z ] : [ mazuki ] (三日月)  
[ d ] : [ kaudu ] (角)

## 例⑩

{ [ ʒ ] : [ ʒu・ ] (しっば) [ kaʒi ] (風)  
[ j ] : [ ju・me・ ] (10枚) [ saji ] (さじ)

## 例⑪

{ [ ts ] : [ empitsugwa ] (小さい鉛筆)  
[ č ] : [ ma・kai iun ] (どこへ行くのか)

## 例⑫

{ [ ʔ ] : [ ʔua ] (豚) [ ʔya・ ] (あなた)  
[ wa ] (輪) [ ya・ ] (屋、矢)

琉球語を、日本語の中の一方言とみなすかどうなについては、かなり疑問の余地がある<sup>(注9)</sup>。だが、全く別の系統に属する言語と違い、大部分の音に関しては、ある程度予測しながら作業することが出来た。ただ、[ ʔ ]は、琉球語首里方言特有の phoneme であることもあり、あいまいな問題が残っている。と言うのは、確かに、上の例⑫からも、明らかな対立を呈している上、また、過去の研究からも、[ ʔ ]がそれ自身、単独の phoneme であることは明らかにされている。現に我々が実地でデータを集めながら、インフォーマントの発音した語を繰り返していると、時々彼らから、[ ʔ ]が落ちていると指摘を受けた。ところが、その一方では、この様にして実際に採集した資料を沖縄語辞典と照らし合わせてみると、かなり[ ʔ ]がなおざりにされていることが分かった。その例として、[ ʔusuyun ] (押す) が [ usuyun ]、[ ʔuya ] (親) が、[ uya ]、[ ʔi・bi ] (指) が [ i・bi ]と発音されている。これらの例には、[ ʔ ]の有無によって意味の異なる minimal pairs が発見されなかった。多分、⑫の例の様に minimal pairs を持つ場合と違い、[ ʔ ]がなおざりにされ易いからであろう。ともあれ、これは、首里方言が、実際の日常生活の中ではあまり使われなくなっている、という現象の、一つの現れであると言える。

## 例⑬

[ p̺ ] : [ p̺a・ ] (葉) [ mip̺isa ] (足の敬称)  
[ h ] : [ ha・ ] (歯) [ mih̺iji ] (あごひげ)



宮古の方言では、花[ hana ]のことを、[ pana ]と言うらしい。かな表記では共にハ行でするところの日本語の子音[ h ]が、首里方言では[ p ]と[ h ]として対立を示し、宮古では[ p ]の形で共時的に存在する、というのは大変興味深い事実である。これら[ p ][ p̥ ]、[ h ]音に関しては、歴史的（通時的）に調査していくことは、有意義なことであろう。

## 例⑭

[ w ] : [ waɾabi ] (子供)

[ ʔwi · ] (上)

[ kuɾa · gwa · ] (すずめ)

[ y ] : [ ya · ɕi ] (やつ)

## 例⑮

[ ɸ ] : [ ɸo · puya · ] (小さい時のおたまじゃくし、蚕のチゴ)

[ ɸo · ya · ] (坊や)

## 例⑯

[ z ] : [ mazuki ] (三日月)

上の⑭⑮⑯の音を持つ語は、極めて少なく資料からはここに示しただけしか例がない。そのため、他の音と対をなす、minimal pairs また analogous pairs は、見いだせなかった。従って今回の調査からだけでは、phoneme として独立のものであるか否かは、証明しきれない。後で §1. 1. 2 分析②で述べる方法は、沖縄語辞典などを用いて、一応の推測をたてるにとどまった。

さらに我々は、vowels についても同様に、minimal pairs、analogous pairs における対立を見出し、phonemes を導き出していった。

## 例⑰

{ [ a · ] : [ ta · ga ] (誰が)    [ ma · ] (どこ)  
[ i · ] : [ ti · ] (手)    [ ʔmi · ] (眼)

## 例⑱

{ [ a · ] : [ waɾaba · ] (ガキ)  
[ i ] : [ waɾabi ] (子供)

## 例⑲

{ [ a ] : [ ʔɾma ] (馬)    [ iɕimɾakkwa ] (石枕)  
[ i ] : [ ʔɾmi ] (梅)    [ miɕkkwa · ] (盲人)

## 例⑳

- $$\left\{ \begin{array}{l} [a \cdot]: [mikkwa \cdot] \text{ (盲人)} \\ [a]: [i\text{š}imakkwa] \text{ (石枕)} \\ [an]: [yakkwan] \text{ (やかん)} \end{array} \right.$$

## 例㉑

- $$\left\{ \begin{array}{l} [a]: [ʔi\text{č}a] \text{ (逢う)} \\ [a \cdot]: [ʔa\text{č}\text{č}a \cdot] \text{ (歩人)} \end{array} \right.$$

## 例㉒

- $$\left\{ \begin{array}{l} [a \cdot]: [aya \cdot] \text{ (お母さん)} \\ [e \cdot]: [aye \cdot] \text{ (まあー！)} \end{array} \right.$$

## 例㉓

- $$\left\{ \begin{array}{l} [a]: [ka\text{s}a] \text{ (傘)} \quad [ta\text{č}i\text{č}i] \text{ (2月)} \quad [ya\text{č}i\text{č}i] \text{ (8月)} \\ [u]: [ku\text{s}a] \text{ (草)} \quad [tu\text{č}i\text{č}i] \text{ (10月)} \quad [yu\text{č}i\text{č}i] \text{ (4月)} \end{array} \right.$$

## 例㉔

- $$\left\{ \begin{array}{l} [a \cdot]: [ya \cdot \text{č}i] \text{ (やつ)} \\ [u \cdot]: [yu \cdot \text{č}i] \text{ (雪)} \end{array} \right.$$

## 例㉕

- $$\left\{ \begin{array}{l} [i]: [ʔi\text{bi}] \text{ (えび)} \quad [ʔadzi] \text{ (味)} \\ [i \cdot]: [ʔi \cdot bi] \text{ (指)} \quad [ʔadzi \cdot] \text{ (父)} \end{array} \right.$$

## 例㉖

- $$\left\{ \begin{array}{l} [i]: [šin] \text{ (千)} \\ [e]: [šen] \text{ (栓)} \end{array} \right.$$

## 例㉗

- $$\left\{ \begin{array}{l} [i \cdot]: [ʔm\text{mi} \cdot] \text{ (お姉さん)} \\ [e \cdot]: [ʔm\text{me} \cdot] \text{ (おばあさん)} \end{array} \right.$$

## 例㉘

- $$\left\{ \begin{array}{l} [i]: [mi\text{č}i\text{č}i] \text{ (三月)} \quad [ʔumi] \text{ (海)} \\ [u]: [mu\text{č}i\text{č}i] \text{ (六月)} \quad [ʔumu] \text{ (芋)} \end{array} \right.$$

## 例㉙

- $$\left\{ \begin{array}{l} [i \cdot]: [ki \cdot] \text{ (木)} \quad [ʔi \cdot bi] \text{ (指)} \\ [u \cdot]: [ku \cdot] \text{ (功、甲)} \quad [ʔubi] \text{ (帯)} \end{array} \right.$$

## 例㉚

- $$\left\{ \begin{array}{l} [u]: [č\text{u}] \text{ (人)} \quad [k\text{u}mui] \text{ (水たまり)} \\ [u \cdot]: [č\text{u} \cdot] \text{ (今日)} \quad [ku \cdot mui] \text{ (こうもり)} \end{array} \right.$$

## 例③①

$$\left\{ \begin{array}{l} [u]: [\text{či}\underline{\text{č}}\text{un}] \text{ (聞く)} \\ [o\cdot]: [\text{či}\underline{\text{č}}o\cdot n] \text{ (着ている)} \end{array} \right.$$

以上の方法で、phonemes を導き出してきたのであるが、資料の量、種類に限界があり、十分な minimal pairs、analogous pairs が見つからなかったものがいくらかあった。その様な phones については、以下の手段をとった。

## 1. 1. 2 分析②

まず、[p] と [b]、[s] と [ʃ] などの様に、place of articulation (調音点)、manner of articulation (調音様式) などが似ている phones の pairs、(suspicious pairs) に目をつけ、その大体の分布を観察するのである。逆に、2つの phones が、complementary distribution (相補分布) をなしていれば、それらは同一の phoneme における、allophones であろうと考えられる。

最初に、表2の様に、consonants とその起こる前後環境を表わしてみた。そこで2つの問題点に気付いた。一つは、表のあいた部分が、本当にその環境には起こり得ないことを示しているのか、あるいは単なる資料不足であるかがはっきりしない点。もう一つは、少なくとも日本語は、consonant+vowel、(もしくは vowel のみ) という、モーラから成っているという点である。そのため、前に述べたサ行の例からも分かる様に、後ろの vowel の種類が、前の consonant に影響を与えることはあっても [s/\_i→ʃ]、consonant が、前の vowel の影響を受けて変化することはないのである。琉球語首里方言にも、このことがあてはまる。表2では、/v-v/、/v·-v·/、等の様に、long vowels と short vowels の区別はしているが、その種類までは示されていない上、前にくる vowel と後にくるそれを、等価値に扱っている点で、あまり信憑性がない。

表2 The distribution of Consonants (前後環境を大まかに見たもの)

	#_	v_v	v*_v	v_v*	v*_v*	_#	v__v	c_v	N*_	?_	
p		○					○		○		p
t	○	○	○	○	○		○		○		t
k	○	○	○	○	○		○				k
b	○	○	○	○	○				○		b
d	○	○	○	○	○				○		d
g	○	○	○	○	○				○		g
ɸ	○	○	○	○	○						ɸ
s	○	○	○	○	○		○		○		s
ʃ	○	○	○	○	○				○		ʃ
ɸ	○										ɸ
z		○									z
ʒ	○	○	○	○							ʒ
ts		○									ts
č	○	○	○	○	○		○		○	○	č
dz		○	○		○				○		dz
ǰ	○	○	○	○					○		ǰ
m(ɱ)	○	○	○	○	○		○		/	○	m(ɱ)
n(ɳ)	○	○	○	○	○	○	○			○	n(ɳ)
ŋ			○			○	○		/		ŋ
w	○	○	○		○			○		○	w
ř	○	○	○	○	○		○				ř
y	○	○	○	○	○			○	○		y
ʔ	○								○	/	ʔ
h	○	○		○							h

\*N は Nasal ([n] [ɳ] [m] [ɱ] [ŋ]) を示す

そこで考えたのが表3である。今度は、[s]と[ʃ]がはっきりと complementary distribution を呈しているなど、かなり明確になっている。(cf. 表1の[s]と[ʃ]) ただし依然として、資料不足による穴も残されていると推測はしている。今後、この欠落を埋めていくのが、我々の一つの課題となろう。

表3 The distribution of consonants (後述母音の種類によって細かく分けたもの)

	i	e	a	u	o	i•	e•	a•	u•	o•	
	i	e	a	u		i•	e•	a•	u•	o•	
p	○		○				○				p
t	○	○	○	○	○	○		○	○	○	t
k	○		○	○		○	○		○	○	k
b	○	○	○	○		○	○	○			b
d	○	○	○	○	○	○	○			○	d
g	○	○	○	○		○	○	○		○	g
Ṗ	○		○	○		○	○	○			Ṗ
s			○	○				○		○	s
š	○	○			○	○	○				š
ḥ											ḥ
z				○							z
ž	○		○						○		ž
ts				○							ts
č	○		○	○		○		○	○	○	č
dz	○										dz
ǰ	○		○						○		ǰ
m(ṃ)	○	○	○	○		○	○	○	○	○	m(ṃ)
n(ṇ)	○		○	○	○	○	○		○	○	n(ṇ)
ŋ											ŋ
w	○		○	○		○		○	○		w
ř	○	○	○	○	○	○	○	○			ř
y	○		○	○		○	○	○	○	○	y
ʔ	○		○	○	○	○	○		○		ʔ
h	○										h

1. 1. 3 結果

以上の結果をまとめた ponetic chart が、次のものである。図 3、図 5 がそれぞれ con-  
sonants と vowels の phonetic chart、そこから導き出した phonemic chart が、図 4、図 6 で  
ある<sup>(注10)(注11)</sup>。

p	t	k
b	d	g
ɸ	s	š
ɸ	z	ž
	ts	č
	dz	j
m	n	
ɱ	ɳ	
	ɲ	
w	ř	y

図 3 Phones of Consonants

p	t	k
b	d	g
ɸ	s	h
	z	ž
	ts	č
	dz	j
m	n <sub>1</sub>	
	n <sub>2</sub>	
w	ř	y

図 4 Phonemes of Consonants

i	i •
e	e •
a	a •
	o •
u	u •

図 5 Phones of vowels

i	i •
e	e •
a	a •
	o •
u	u •

図 6 Phonemes of vowels

以上に、上で phoneme を割り出す過程において、我々が同じ phoneme の allophones 又は、  
free variations であろうとみなしたものについての circumstances（環境）を記述しておく。  
条件は、母音の種類も含め、我々の資料から観察できるものからのみ割り出した。つまり、  
理論的には存在するはずのものが、我々が free variation であるとみなしたもの、それ以外  
が allophones である。

Circumstances (allophones or free variations)

/b / [ b ] / #\_v( • ), v\_v, v\_v •, v •\_v •, m\_v  
f \ ( following vowels; i, i •, e, e •, a, a •, u )

$$\backslash [b]/\#\_v(\cdot)$$

( following vowel; o )

$$/p/[p]/\#\_v(\cdot), v\_v, v\_v, v\_v, v\_v, v\_v$$

f ( following vowels; i, i, e, e, a, a, u )

$$\backslash [b]$$

$$v\_v$$

( following vowel; a )

$$/s/[s]/\#\_v(\cdot), v\_v, v\_v, v\_v, v\_v, n\_v$$

( following vowels; a, a, u, o )

$$[\tilde{s}]/\#\_v(\cdot), v\_v, v\_v, v\_v, v\_v$$

( following vowels; i, i, e, e, o )

$$/h/[h]/\#\_v(\cdot), v\_v, v\_v$$

f ( following vowels; i, e, a, o, u )

$$\backslash [x]/\#\_v(\cdot), v\_v$$

( following vowels; i, a, u )

$$/m/[m]/\#\_v(\cdot), v\_v, v\_v, v\_v, v\_v, \_v(\cdot)$$

( following vowels; i, i, e, e, a, a, u )

$$/n_1/[n]/\#\_v(\cdot), v\_v, v\_v, v\_v, \_v, \_v(\cdot)$$

( following vowels; i, i, e, e, a, a, u, u )

$$[n]/v\_v$$

( following vowel; i )

$$/n/[m]/v\_bilabial\ C., v\_ \#$$

$$[m]/\#\_bilabial\ C. f$$

$$[n]/v\_alveolar\ C., v\_ \#$$

$$[n]/\#\_alveolar\ C. f$$

$$[ŋ]/v\_velarstop\ C., v\_ \#$$

\*①/m/, /n/の $\#\_v(\cdot)$ という環境は、本来は $\#\_v(\cdot)$ であったが、 $\#$ がなおざりにされたものであろう。

\*②/ $n_1$ /は、な行予音の $[n]$ で、後に vowels がついて、1 モーラとなるものである。また、

/n<sub>2</sub>/は、[ん]という、かな表記をもつ、すなわち、それ自身でモーラを作るものである。

\*③/n<sub>2</sub>/の[ m ][ ɱ ][ n ][ ɳ ][ ɲ ]は allophones である。ただし、[ m ][ n ][ ɲ ]のいずれにも v\_# という環境があることは、日本語のいわゆる「ん」は、特に語尾にきたときは、free variation の傾向をもつことを示しているといえよう。この他、語末の母音を nasaliz して、「ん」を発音することもある。cf. 注 6

#### 1. 1. 4 まとめ（反省と今後の課題）

今までに述べてきた他に、丈[ take ]のことを[ taki ]、手[ te ]を[ ti・ ]、というように、東京方言で、[ e ]と発音されるものが首里方言では[ i ]となり、歳[ toši ]のことを[ tuši ]、喜ぶ[ yořukubu ]と言うように、我々が[ o ]と発音する音を、首里では[ u ]と発音する、といった、vowels の対応関係がみられた。

（首里方言におけるいくつかの phones の東京方言との対応）

##### ①a) [ e ] vs [ i ] 又は [ i・ ]

（東京方言）	（首里方言）	（意味）
[ take ]	[ taki ]	丈
[ seŋgan ]	[ šiŋkwan ]	千貫
[ teŋ ]	[ tiŋ ]	天
[ kage ]	[ ka・gi ]	影
[ kame ]	[ ka・mi ]	亀
[ matsuge ]	[ mačiigi ]	まつげ
[ te ]	[ ti・ ]	手
[ ne ]	[ ni・ ]	根

##### ①b) [ o ] vs [ u ]

（東京方言）	（首里方言）	（意味）
[ kotoba ]	[ kɯtuba ]	言葉
[ hoši ]	[ huši ]	星
[ šigoto ]	[ šiɡutu ]	仕事
[ oya ]	[ ʔuya ]	親
[ mono ]	[ munu ]	者、物
[ omoi ]	[ umui ]	想い

また、鞠[ maři ]を[ ma・i ]、はかり[ hakaři ]を[ hakai ]と言うなど、後ろに“i”をともなった時に[ ř ]の音が消えているという、対応も見られた。



## ②[ ři ] vs [ i ]

(東京方言)	(首里方言)	(意味)
[ ma <u>ř</u> i ]	[ ma · <u>i</u> ]	鞠
[ o <u>ř</u> inobo <u>ř</u> i ]	[ ʔu <u>ř</u> inubui ]	降り上り
[ sonawa <u>ř</u> i ]	[ sunawai ]	備わり
[ ha <u>ka</u> ři ]	[ ha <u>ka</u> i ]	はかり
[ to <u>ř</u> i ]	[ tui ]	鳥
[ kusu <u>ř</u> i ]	[ kusui ]	葉

さらに、[ a ]にはさまれた[ w ]が消えて、[ a · ]と長母音になっていたり、逆に東京方言では[ w ]の入らないところに[ w ]が入って、[ kwa ]、[ gwa ]となっている現象もみられた。

## ③[ awa ] vs [ a · ]

(東京方言)	(首里方言)	(意味)
[ <u>a</u> wa <u>s</u> efu ]	[ <u>a</u> · sun ]	合わせる
[ <u>k</u> awa ]	[ <u>ka</u> · ]	皮、川
[ <u>s</u> awa <u>ř</u> e ]	[ <u>sa</u> · ře ]	触れ
[ sodate <u>ka</u> tawa řiřanai ]	[ sudatikata · řiřan ]	育て方は知らない
[ <u>k</u> awa <u>ř</u> a ]	[ <u>ka</u> · řa ]	川、河原
[ <u>t</u> awa <u>ř</u> a ]	[ <u>ta</u> · řa ]	俵

## ④[ ka ], [ ga ] vs [ kwa ], [ gwa ]

(東京方言)	(沖縄方言)	(意味)
[ se <u>ŋ</u> ga <u>n</u> ]	[ ři <u>ŋ</u> kw <u>a</u> n ]	千貫
[ sa <u>ŋ</u> ka <u>n</u> ]	[ sa <u>ŋ</u> gw <u>a</u> n ]	三貫
[ ko <u>m</u> o <u>č</u> i ]	[ kw <u>a</u> mu <u>č</u> i ]	子持ち
[ go <u>č</u> iso · sama ]	[ kw <u>a</u> č <u>č</u> i · sabitan ]	ごちそうさま

それから、音声学的には、ラ行の発音がダ行に近い音で聞こえる、すなわち、[ ř ]が[ d ]に聞こえることもあった。

## ⑤[ ř ] vs [ d ]

(informant による音読)	(音読した本の表記)	(沖縄語辞典の表記) (注12)
[ wa <u>d</u> iga · mi ]	「割 <u>り</u> 甕」	[ wa <u>ř</u> igami ]
[ nu <u>k</u> u <u>ř</u> i <u>d</u> i ]	「鋸 (ゆくじり)」	[ nu <u>k</u> uzi <u>ř</u> i ]
[ su · <u>d</u> a ]	「梢 (すうーら)」	[ su <u>u</u> ra ]

日本語と比べて気付いたことの点を基に歴史的な視点から研究を進めていくことが、今後の課題であり、最も興味深い点でもある。以上が、今回の首里方言調査における音韻面である。従来の国語学的分析法には問題点が多いと考えた我々は、構造主義的手法を使うよう、試みた。しかし、基本的には琉球語は、日本の音韻構造と同じく、モーラから成すため、最終的には、国語学の方法に頼ってしまうことになった。概説のところでも触れたように、近年盛んである systemic linguistics を応用して分析に臨めば、さらに実り多い結果が得られるのではないかと今後の研究に期待している。

また、今回の調査は、初めての試みであることもあり、準備不足による資料の欠落が幾分見られた様だ。例えば、資料は、名詞、動詞などを中心に、やみくもに集めたが、擬音語、(擬声語) など多い [p]、[b] などとあまり集められなかった。

以上の反省点(歴史的見地、systemic linguistics の応用、資料を集める際の下準備)に留意しつつ、次回から、琉球語の音韻組織の再構成、そして Proto - Ryukyu の再構成にむけての調査研究を進めていきたいと思っている。今回の調査がその第一歩として今後の調査に貢献するものと期待しつつ、この音韻の部をしめくりたい。

## 2. 形 態

### 2. 1. 動詞の形態について

#### 2. 1. 1 はじめに

琉球語首里方言の動詞を分析するあたり我々は現地調査で約60語の動詞の様々な形を場面設定や共通語の例文によりインフォーマントから引き出した。そのうち、よりわかりやすく比較的資料の多く集まった形についてこれから示す分析を行ったが、それを紹介する前に、現在の首里方言の動詞のもとになった形について、東京都立大学の中本正智先生の解説をもとに少し述べてみたい。

#### 2. 1. 2 元来の活用形

首里方言の動詞では、終止形と連体形のもとの形は、Proto - Japanese (日本語祖語) の連用形に「おり」が付いたもので、その活用は「おり」に準ずる。これは、日常の使用に際し「～する」よりは「～している」の方が適していることから、もともと進行形を表わす形が終止形にとって替わったものと思われる。例を挙げて説明すると、「飲む」という動詞は首里方言で /numun/ というが、これは Proto - Japanese<sup>注12</sup> の「飲みおり」から、「飲み」→ /num/、「おり」→ /un/ と変化して考えられる。この「おり」から /- un/ への変化については、音韻の分析の中でも述べたように現在の日本語の /o/ の音と琉球語首里方言の /u/ の音との間に対応があること、日本語において、例えば /wakbʔanai/ → /wakannai/ のように /ɾ/ から /n/ への変化が起こりやすいことの2点から予想できる。終止形、連体形以外の活用形は、そのもとの形においては、Proto - Japanese の活用形と同じである。

また、今回我々が分析を行った形については、そのほとんどが、連用形に助詞や助動詞の付いたものである。これについては、それぞれの形の項で述べることにする。

## 2. 1. 3 動詞の語幹と語尾

動詞は形の上で大きく2つの分類することができる。1つは母音で終わる語幹（以後、母音幹と呼ぶ）を持つもの、もう1つは子音で終わる語幹（以後、子音幹と呼ぶ）を持つものである。この違いにより、語尾の形も異なってくる。

## 2. 1. 4 終止形

終止形の語尾は、/－ in/と/－ un/の2種類である。母音幹には/－ in/が、子音幹には/－ un/が付く（表4を参照）。

表4 終止形の例

a) 母音幹動詞		b) 子音幹動詞	
洗う	/ʔara－in/	歩く	/ačč－un/
押す	/ʔusu－in/	言う	/ʔy－un/
着る	/či－in/	行く	/ʔič－un/
座る	/i－in/	(お茶を)入れる	/čij－un/
たたく	/sugu－in/	打つ	/ʔuč－un/
作る	/tsuku－in/	書く	/kač－un/
登る	/nubu－in/	(帽子を)かぶる	/kanj－un/
入る	/ʔi－in/	かむ	/kana・s－un/
引っぱる	/hippa－in/	死ぬ	/ma・s－un/
踏む	/kudami－in/	する	/s－un/
降る	/pu－in/	抱く	/dač－un/
笑う	/waʔa－in/	出す	/pjas－un/
</～i/+/－in/→/～i・n/>		食べる	/kam－un/
入れる	/ʔiri・n/	泣く	/nač－un/
(電話を)かける	/kaki・n/	脱ぐ	/haʔiy－un/
聞こえる	/čikaʔi・n/	寝る	/ninj－un/
くずれる	/kundi・n/	飲む	/num－un/
蹴る	/ki・n/	はがす	/haʔ－un/
尋ねる	/tanni・n/	(靴を)はく	/kum－un/
つかむ	/kačimi・n/	(下駄を)はく	/hač－un/
なでる	/nadi・n/	はじく	/hanč－un/
握る	/niʔi・n/	走る	/haie・s－un/
よそう	/ʔukagi・n/	見る	/nʔj－un/
		待つ	/muč－un/

ただし、1人のインフォーマントは、「押す」に相当するものとして/<sup>2</sup>usuin/と/<sup>2</sup>usun/の両方を使用しており、母音幹と子音幹の区別が多少曖昧になりつつあることも予想される。また先の音韻分析の中の例に/<sup>2</sup>usuyun/という形があった。中本先生の解説によると、/–yun/という形は/–in/のもとの形である。つまり、/–yun/から/–in/への変化に伴って/<sup>2</sup>usuyun/から/<sup>2</sup>usuin/になったが、その古い方の形もまだ使われているということであろう。

なお、母音幹のうち/i/で終わるものは語尾/–in/の/i/と同化し、長母音となって/–i·n/と発音されることが多い（表4のaを参照）。

## 2. 1. 5 否定形

否定を表わす語尾は、/–řan/と/–an/の2種類である。母音幹には/–řan/が、子音幹には/–an/が付く（表5を参照）。

表5 否定形の例

a) 母音幹動詞		b) 子音幹動詞	
居ない	/u – řan/	行かない	/ <sup>2</sup> ik – an/
入れない	/ <sup>2</sup> iři – řan/	言わない	/ <sup>2</sup> y – an/
押さない	/ <sup>2</sup> usu – řan/	書かない	/kak – an/
着ない	/či – řan/	しない	/s – an/
座らない	/i – řan/	飲まない	/num – an/
登らない	/nubu – řan/	見ない	/ṛd – an/

## 2. 1. 6 過去形

過去を表わす語尾は、/–tan/と/–an/の2種類である。母音幹には/–tan/が、子音幹には/–an/が付く（表6を参照）。

表6 過去形の例

a) 母音幹動詞		b) 子音幹動詞	
あった	/ <sup>2</sup> a – tan/	飲んだ	/nud – an/
居た	/u – tan/	(cf 飲まない/num – an)	
押した	/ <sup>2</sup> usu – tan/	見た	/ṛč – an/
登った	/nubu – tan/	(cf 見ない/ṛd – an/)	
見えた	/mi – tan/		

ただし、/－ an/の付く場合、語幹末の子音が変化し否定の形と区別されている（表6のbを参照）。これは、元来過去を表わす形が連用形に「たり（古くは「てあり」）」が付いたものであり、これが音韻変化の過程で語幹末の子音に影響を及ぼしたためであろうと思われる。

また、過去の否定を表わす場合は、否定の/řan//－ an/の後に過去の/－ tan/を付ける（表7を参照）。

表7 過去の否定の例

a) 母音幹動詞		b) 子音幹動詞	
居なかった	/ʔu－řan－tan/	飲まなかった	/num－an－tan/
入れなかった	/ʔiři－řan－tan/	見なかった	/ŋč－an－tan/
押さなかった	/ʔusu－řan－tan/		
登らなかった	/nubu－řan－tan/		
見えなかった	/mi・－řan－tan/		

## 2. 1. 7 進行形

進行・継続・完了を表わす語尾は、/－ to・n/である。母音幹には/－ to・n/が、子音幹には/－ o・n/が付く（表8を参照）。

表8 進行形の例

a) 母音幹動詞		b) 子音幹動詞	
怒っている	/waji－to・n/	歩いている	/ačč－o・n/
押している	/ʔusu－to・n/	打っている	/ʔučč－o・n/
かけている	/kaki－to・n/	書いている	/kač－o・n/
くずれている	/kundi－to・n/	かぶっている	/kant－o・n/
つかんでいる	/kačimi－to・n/	している	/s－o・n/
握っている	/niĵi－to・n/	抱いている	/dač－o・n/
亙っている	/nubu－to・n/	飲んでいる	/nud－o・n/
降っている	/pu－to・n/	磨いている	/migač－o・n/
太っている	/kwe・－to・n/	見ている	/ŋč－o・n/
回っている	/ma・－to・n/	持っている	/mučč－o・n/
笑っている	/wařa－to・n/		
</～i/(1音節)+/－ to・n/→/～ičo・n/>			
着ている	/či－čo・n/		
座っている	/i－čo・n/		

なお、hhgh – front vowel の/i/で終わる 1 音節の母音幹に/– to・n/が付くとき、口蓋化により/čō・n/に変化するようである（表 8 の a を参照）。この現象は、次に示す連用形にも例がみられる。

また、過去の進行を表わす場合は、/– to・n/の最後の/n/が落ち、さらに過去の/– tan/が付く（表 9 を参照）

表 9 過去の進行の例

a) 母音幹動詞		b) 子音幹動詞	
着ていた	/či-čō- tan/	書いていた	/kač-o- tan/
座っていた	/i-čō- tan/	かぶっていた	/kant-o- tan/
		していた	/s-o- tan/
		見ていた	/ŋč-o- tan/

## 2. 1. 8 連用形

連用形の語尾は、/– te・/と/– e・/である。母音幹には/– te・/が、子音幹には/– e・/が付く（表10を参照）。

表10 連用形の例

a) 母音幹動詞		b) 子音幹動詞	
押して(いない)	/ʔusu-te・(uŋan)	かぶって(いなかった)	/kant-e・(uŋantan)/
着て(いなかった)	/či-če・(uŋantan)/	飲んで(いない)	/nud-e・(uŋan)/
座って(いなかった)	/i-če・(urantan)/		

この形は、Proto – Japanese の連用形に「ては」が付いたものであらうと思われる。ここでも、先に述べたように口蓋化が起こり、high – front vowel の/i/で終わる 1 音節の母音幹では、/– te・/が/– če・/となる（表10の a を参照）

## 2. 1. 9 命令形

命令の語尾は、/– ŋe・/と/– ě・/である母音幹には/– ŋe・/が、子音幹には/– ě・/が付く（表11を参照）。

表11 命令形の例

a) 母音幹動詞		b) 子音幹動詞	
入れろ	/ʔiri - ře · /	言え	/ʔy - e · /
押せ	/ʔusu - ře · /	書け	/kak - e · /
かけろ	/kaki - ře · /	かぶれ	/kand - e · /
着ろ	/či - ře · /	(cf 連用形/kant - e · /)	
座れ	/i - ře · /	消せ	/ča · s - e · /
つけろ	/čiki - ře · /	はがせ	/hag - e · /
引っぱれ	/hippa - ře · /	(靴を)はけ	/kum - e · /
		(下駄を)はけ	/hak - e · /
		脱げ	/nug - e · /
		飲め	/num - e · /
		(cf 連用形/nud - e · /)	
		(肩を)もめ	/mum - e · /

ただし、/－e · /が付く場合、語幹末の子音の変化により連用形と区別されている（表11のbを参照）。中本先生によると、これは仮定形を命令形に転用しているためで、/－e · /は助詞「ば」が変化したものと思われる。つまり、仮定形の「～すれば」という表現を使うことで語調をやわらげようとしたと考えられる。

禁止を表わす場合は2通りの表現がある。1つは否定の形にさらに/－ke · /が付くもの、もう1つは語幹に/－unna - ke · /が付くものである（表12を参照）。

表12 禁止の例

a) 母音幹動詞		b) 子音幹動詞	
入れるな	/ʔiri - řan - ke · /	言うな	/ʔy - unna - ke · /
押すな	/ʔusu - řan - ke · /	書くな	/kak - unna - ke · /
		飲むな	/num - unna - ke · /
		泣くな	/nak - unna - ke · /
			/nak - an - ke · /

いずれも/－ke · /は、「おけば」の変化したものであろうと考えられる。これも、語調をやわらげるため、「～しないでおけば」のように表現したものであろう。

## 2. 1. 10 語尾どうしの関係

以上が個々の形の分析である。さらに理解を深めるために、代表的な語として、母音幹動詞の/ʔusuin/（「押す」）と子音幹動詞の/numun/（「飲む」）を選び、その語尾変化を表さし

た（表13）。実際の資料のない部分は、他の動詞の形から推測した。

表13 /ʔusuin/と/numun/の語尾変化

語 幹	/ʔusu -/		/num -/	
原 形	/ʔusu - in/	押す	/num - un/	飲む
否 定	/ʔusu - řan/	押さない	/num - an/	飲まない
過 去	/ʔusu - tan/	押した	/nud - an/	飲んだ
過 去 の 否 定	/ʔusu - řan - tan/	押さなかった	/num - an - tan/	押まなかった
進 行	/ʔusu - to · n/	押している	/nud - o · n/	飲んでいる
過 去 の 進 行	/ʔusu - to · - tan/* <sup>1</sup>	押していた	/nud - o · - tan/* <sup>2</sup>	飲んでいた
連 用 形	/ʔusu - te · (uřan)/	押して(いない)	/nud - e · (uřan)/	飲んで(いない)
命 令	/ʔusu - ře · /	押せ	/num - e · /	飲め
禁 止	/ʔusu - řan - ke · /	押すな	/num - an - ke* <sup>3</sup> /num - unna - ke · /	飲むな

- \*1 /çi - čo · n/（着ている）→/çi - čo · - tan/（着ていた）などから推測。
- \*2 /kač - o · n/（書いている）→/kač - o · - tan/（書いていた）などからの推測。
- \*3 /nak - an/（泣かない）→/nak - an - ke · /（泣くな）からの推測。

これより語尾どうしの関係について、過去の語尾は他のものよりも後に、また否定の語尾は他のものよりも先に、それぞれ付加されるということがわかる。

2. 1. 11 おわりに

以上が我々の分析と考察だが、今回の現地調査では、場面設定や例文に問題があり、思いどうりの内容が引き出せなかったり、資料整理の遅れから資料の偏りや不足が生じたりして分析の妨げとなってしまったという反省点がある。

また、今回資料不足で分析を行なかった形もあり、中本先生の解説によれば/ - e · n/ / - o · čun/ / - abi · n/ など我々がその存在に気付かなかった形も数多くある。さらに視野を広げて琉球語全体を見れば、方言によって違った形態が見られる。例えば、与那国方言一つについても、「書く」は/kagun/（首里方言では/kačun/）、「書かない」は/kaganun/（首里/kakan/）、「書くな」は/kagunna/（首里/kakunnake · /）である（『琉球与那国方言の研究』pp. 110－3）首里方言の動詞の形態についてのより深い分析、琉球語の方言の調査、また方言どうしの比較が、Proto－Ryukyu の reconstruction のためには不可欠であり、我々の今後の課題である。

2. 2 形容詞の形態について

形容詞を調査するにあたり、私たちは約90個の語彙を収集した。そのうちの約20個は、形容詞というカテゴリーに属さず、むしろ状態動詞の「～テイル」「～シテイル」型にあたる



ものであることが判明し<sup>注14</sup>、それらを除く68語を調査の資料とした。

実地調査に基づく分析と私たちの考察を紹介する前に、首里方言に見られる形容詞の形態についての概説として、国立国語研究所編『沖縄語辞典』に基づく例示をしたいと思う。

2. 2. 1 文献に基づく解説および例示

(1) 活用

首里方言のすべての形容詞は/－ ku/におわる「ク連用形」と、形容詞語幹+/－ san/という形の「サアリ型活用」の2つを持つ（p 81）。サアリ型活用は動詞/<sup>2</sup>an/（ある）の活用に準じている。

例）ク連用形     /kibiši－ ku/     （厳しく）  
      サアリ型活用/kibiši－ san/（厳しい）  
                  /kibiši－ sařa/（厳しかったら）

また、形容詞全体を、ク活用かシク活用かによって大別することができる。

例）ク活用    /taka－ san/（高い）→/taka－ ku/（高く）  
      シク活用/<sup>2</sup>utuřu－ řan/（恐ろしい）→/<sup>2</sup>utuřu－ řiku/（恐ろしく）

このように、ク活用は語尾が/－ san/から/－ ku/へと変化するのに対し、ク活用は/－ řan/から/－ řiku/へと交替する。

しかし、シク活用に属するものの中でも、/<sup>2</sup>aya－ san/（危ない）、/sabi<sup>2</sup>－ san/（寂しい）等は例外的に/－ řan/で終わらないので、ク活用の/<sup>2</sup>a<sup>2</sup>－ san/（浅い）、/wa<sup>2</sup>－ san/（悪い）などとの区別がしにくい。

また、/kana－ řan/（可愛い）、/kaba－ řan/（香りが良い）のように、シク活用に属しながら、ク連用形が/kana－ řiku/ではなく/kana－ ku/、/kaba－ řiku/ではなく/kaba－ ku/となるような例もある。

なお、平民風の発音では、シク活用の形容詞の語尾もすべて/－ san/と発音される。

(2) 動詞/<sup>2</sup>an/（ある）の活用について

/<sup>2</sup>an/は単独で用いられた場合、不規則動詞に分類され、一般の動詞とは異なった特殊な活用をする<sup>注15</sup>（下表参照）。

表14    /<sup>2</sup>an/の活用

否 定	過 去	過去否定	連 体	仮 定	已 然	連 用
ne・n ne・řan	<sup>2</sup> atan	ne・ntan ne・řantan	<sup>2</sup> ařu	<sup>2</sup> ařa	<sup>2</sup> ařa	<sup>2</sup> ai

基本語幹は/<sup>2</sup>ar -/である。ただし否定は/ne・n/または/ne・řan/となる。似た言葉に/<sup>2</sup>ařan/があるが、これは助動詞/yan/（～だ、～である）の否定である。

## 2. 2. 2 実地調査に基づく分析および考察

私たちが形容詞として収集した言葉は、大きく2つのグループに分けることができた。一つは基本形が/- san/でおわるもの、もう一つは基本形には活用語尾がつかないものである。後者を形容詞として取扱うのは問題が多いことが後々わかってきたので、まずは/- san/でおわるもの（/taka - san/など）について述べてみたい。

表15 サアリ型形容詞の活用

	/kibiři - san/ (厳しい)	/nuku - san/ (暖かい)	/ <sup>2</sup> urpu - san/ (多い)
否 定	- ko・ne・řan - sane・řan	- ko・ne・řan	- ko・ne・řan
過 去	- satan	-satan	- satan
過去否定	-ko・ne・řantan - sane・řantan	- ko・ne・řantan	- ko・ne・řantan
連 体	-sařu	- sařu	- sařu
仮 定	- sařa	- sařa	- sařa
已 然	- saře	- saře	- saře
連 用	- ku	- ku	- ku

琉球語に形容詞活用語尾は、名詞的性質を与える接尾語/sa/と、動詞/<sup>2</sup>an/（ある）から成り立つ、と言われている（上記2. 2. 1参照）。今回私たちの調査結果も、/- san/の活用と/<sup>2</sup>an/の活用がほぼ一致し、この説にそうものとなった。

それでは一つ一つの形について述べてみよう。

### (1) 否定について

例) /kibiři - san/ (厳しい) → /kibiři - sane・řan/ (厳しくない)

/nuku - san/ (暖かい) → /nuku - ko・ne・řan/ (暖かくない)

/<sup>2</sup>urpu - san/ (多い) → /<sup>2</sup>urpu - ko・ne・n/ (多くない)

/- ko・ne・řan/、/- ko・ne・n/については、連用形の項と一緒に論じることにする。そこで、/-sane・řan/という形であるが、これは/sa/と/ne・řan/の二つに容易に分解することができる。文献により、/ne・řan/は/<sup>2</sup>an/の否定であることがわかっているので、/-sane・řan/は肯定形/- san/が/sa/+/<sup>2</sup>an/であることを裏付けている、と言うこと、できよう。

## (2) 過去 過去否定について

例) /kibiši – san/ (厳しい) → /kibiši – satan/ (厳しかった)  
 /nuku – san/ (暖かい) → /nuku – satan/ (暖かかった)  
 /kidiši – sane · řan/ → /kibiši – sane · řantan/  
 (厳しくない) (厳しくなかった)  
 /nuku – ko · ne · řan/ → /nuku – ko · ne · řantan/  
 (暖かくない) (暖かくなかった)

単純な過去の場合、語尾は/– san/から/– satan/へと変化している。これは/<sup>2</sup>an/の過去が、/<sup>2</sup>atan/であることに対応している。

ここで/<sup>2</sup>atan/を簡単に分析してみると、もとは/<sup>2</sup>an/の連用形/<sup>2</sup>ai/に過去の助動詞/tan/が接続した/<sup>2</sup>ai – tan/であったが、何らかの理由により/i/が脱落して/<sup>2</sup>atan/となったものらしい。以上は東京都立大学の中本先生の解説による。

否定の過去は、もとの形に助動詞/– tan/が接続した明解なものである。

## (3) 連体形について

例) /nuku – san/ (暖かい) → /nuku – sařu – hi/ (暖かい日)  
 /kibiši – san/ (厳しい) → /kibiši – sařu – ta · ri/ (厳しい父)

語尾は/– sařu/である。これも/sa/+/<sup>2</sup>ařu/ (/<sup>2</sup>an/の連体形) だと考えられる。

ところで、形容詞の中には、連用形語尾を伴わず語幹のままで名詞と接続するものもあった。これは、複合語を形成した、と見なすことができる。

例) /mi · – san/ (新しい)  
 → (新しい鉛筆)  $\left\{ \begin{array}{ll} \text{/mi · – sařu – empitsu/} & \text{＜形容詞＋名詞＞} \\ \text{/mi · – empitsu/} & \text{＜複合語 (名詞)＞} \end{array} \right.$   
 /maji – san/ (大きい)  
 → (大きい人)  $\left\{ \begin{array}{ll} \text{/maji – sařu – <sup>2</sup>çu/} & \text{＜形容詞＋名詞＞} \\ \text{/maji – <sup>2</sup>çu/} & \text{＜複合語 (名詞)＞} \end{array} \right.$

## (4) 仮定形、已然形について

例) /kibiši – san/ (厳しい)  
 → (厳しかったら) /kibiši – sařa/ <仮定>  
 /kibiši – saře/ <已然>

本土の日本語でも已然形が消滅してしまった様に、琉球語でも形こそ残っているが、両者の意味上の使い分けはほとんどなされていないようだ。

ところで、調査した時点では、この形は/－ saŋa・//－ saŋe・/であり、最後の母音/a//e/は長母音であった。しかし形容詞の語尾は/－ saŋa/、/－ saŋe/であり、その後ろに本土の日本語の「ば」にあたる助動詞/ya/が続くことにより/a/e/が長母音化し、/ya/そのものの音は消えた、ということが、中本先生の解説によりわかった。

(5) 連用形について

例) /nuku－san/ (暖かく) →/nuku－ku/ (暖かく)  
/ʔupu－san/ (多い) →/ʔupu－ku/ (多く)

この形は/sa/を伴わず、語幹+/－ ku/の形の態をとる。これは現在の本土の日本語とも一致し、古語の形がそのまま残ったもの、とすることができる。なぜ連用形だけ昔のまま残ったのか、理由はいろいろ考えられるが、一つには動詞を修飾する際にサアリ型を用いると、動詞が二つ重なるため、重複表現となるのを避けたのではないか、というのが私たちの推測である。

さて、否定の項で保留しておいた/－ ko・ne・n/ (～くない、～くはない) であるが、この語尾の最初の/－ ko・/はク連用形に助詞/ya/が接続することにより母音が high－back vowel /u/から mid－back vowel /o/へと変化して、長母音化したものであるらし

<－ ku－ya－ne・ŋan→－ ko・ne・ŋan>

/－ sane・ŋan/が「～くない」の形にあたるとすれば、/－ ko・ne・ŋan/は「～しくはない」と文法構造上等しい、と言えよう。ただし、意味上のニュアンスも同じかどうかについてはまだ未調査である。

以上、サアリ型活用の7つの形について述べた。次に、基本形が活用語尾を持たない型 (/ʔaka・//çi・ŋu・/など) について話をすすめよう。それらは次の表のようにまとめることができた。

表16

	ʔaka・－φ	çi・ŋu・－φ	puŋiji－φ	ʔupo・ku－φ
否 定	－ yaaŋan	－ yaaŋan	－ yaaŋan	ʔupo・ko・ne・ŋan
過 去	－ yatan	－ yatan	－ yassa － yatan	－ yatan
過去否定	－ yaaŋantan	－ yaaŋantan	－ yaaŋantan	ʔupo・ko・ne・ŋantan
連 体	－φ	－φ	－ na	－ no
仮 定	－ yaŋa	－ yaŋa	－ yaŋa	
已 然	－ yaŋe	－ yaŋe	－ yaŋe	－ aŋe
連 用	－ ku	－φ		－φ

これらの言葉は、原形を除き/－ ya…/の活用をするかに見えた。しかし以下の理由により、これらは名詞および副詞＋助詞/ya/＋動詞/ʔan/ではないかと推測するにいたった。

(i)まず、/ʔupo・ku/（多い、または多く）の活用語尾として、已然形に/ʔaŕe/が現れているが、これはむしろ動詞/ʔaŕe/であり、それを副詞/ʔupo・ku/そのものの形が、サアリ型形容詞のク連用形と似ている事、かつ否定形は/ʔupo・ko・ne・ŕan/で、2連用形と同じ音韻変化をおこしていることから裏付けすることができよう。

(ii)そうすると、他の語の已然形/yaŕe/も、/ya/＋/ʔaŕe/なのではないか。同様に仮定形は/ya/＋/ʔaŕa/、過去は/ya/＋/ʔatan/ではないか。

(iii)それでは、サアリ型と同じくヤアリ型として認めないのはなぜか。それは①原形に/－ yan/を持たないこと、②/ya/は/sa/のように接尾辞ではなく、独立した助詞であることなどが挙げられる。

ところで、/ya/＋/ʔan/の活用であるならば、否定は/－ yane・ŕan/となりそうであるが/ʔaka・/（赤）、/ŕi・ru・/（黄）、/puŕiji/（不思議）の三つとも否定の項は、/－ yaaŕan/である。/ʔaŕan/は/yan/（断定の助動詞）の否定であることは先程述べた（2. 2. 1 参照）。しかし、この/ʔaŕan/を助動詞と見た場合、/－ yaaŕan/は助詞/ya/のすぐ後ろに助動詞が接続することになるので、文法構造的におかしい。この点は、私たちの力が及ばず、未解決のままである。来年以降の調査に期待したい。

以上が私たちの調査における形容詞形態の分析である。

反省として、語彙として集めた形容詞のうち活用まで調べたものは少なかった事、助詞や助動詞などの知識不足による混同、などが挙げられる。

また、私たちは、いわゆる学校文法にそった活用しか調べなかったが、例えば疑問形や希望形といった本土の日本語にはない活用もあるのではないかと、思わせられる時もあった。この問題は今後の調査に委ねたい。

### 3. あとがき

以上の調査報告は、短い期間で収集した資料に基づいた分析の結果である。いろいろ資料不足のため、納得できないところもあると思うが、学生の実地調査体験としては、クラスで習ったテクニックが十分に発揮できたと言えよう。

概説でも断わった様に、我々の目的は、通常言語地理学で行われる、地図を書くのみの目的とは異なって、共時的なデータを分析したことによって通時的な琉球語の変化を把握するということにあった。従って、今後もこの様な調査を積み重ねることにより、もっと深く琉球語の歴史を遡ることができるよう期待している。これからも、琉球語の一つ一つの方言に関する調査を積み重ねて成果をあげながら、琉球語の専門家の意見をも取り入れ、Proto－

Ryukyu という祖語の reconstruction を目指して努力していきたいと思う。

### 注

注1) 1590年に琉球国が朝鮮出兵への協力を拒んだことを口実に、薩摩藩主の島津家久は、琉球の討伐を企てた。1609年に島津は琉球に出兵し、征服した。島津氏の真の目的は、琉球王国が行っていた中国貿易による利益を手中に収めることであった。これが島津氏の琉球入りと呼ばれている事件で、こののちは、琉球は島津に年貢を収め、国王の代替りや重職の任命には島津の認可を受けたり、人質を差し出す、など、薩摩の植民地のような立場になった。

注2) 1971年の全国での廃藩置県とともに、琉球はいちおう鹿児島県の所管となった。しかし、清国との関係(朝貢貿易)は続いていた。明治政府は、これを断ったため、まず、1972年に琉球国を琉球藩とした。次に、1975年に清国との関係を断つように琉球藩主(もとの国王)に要求した。琉球藩はそれを拒否したので、1979年、明治政府は兵を送って首里城を落とし、琉球藩を廃して沖縄県を置くことを宣言した。

注3) インフォーマントの氏名は次のとおりである。(順不同、敬称略)

伊志嶺朝敏、又吉千代、儀間竹子、仲本カメ、知念政徳、上間長和、新城信義、伊狩典子、久手堅憲夫、伊江きみ子、

注4) phonetic transcription (音声表記) はスモーレーのものを使用した。

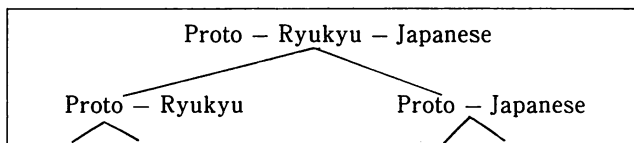
注5) ⑦(a)は、「な行」「ま行」の子音としての対立として [m] [n] が使われている場合、⑦(b)は、「ん」の表記が表されている、すなわち、単独でモーラを作る場合の、nasals である。

注6) 日本語の「ん」は、[m] [n] [ŋ] の他、(語尾の vowel が) nasalize されるものもあり、それらは、すぐ後ろに [b] がくる時は [m] になる、などの様に、前後環境に左右されるものと、単なる free variation のものがあるようだ。

注7) ただし、今回の informant は皆、比較的高齢者であった。実際、若年層の者の間では [ʃe] よりも [se] の方が一般的らしい。

注8) [s] のままである、[sa] [su] [so] も、注意して聞くと、首里方言ではわずかに palatalization がおこっていて、[sa] [su] [so] と [ʃa] [ʃu] [ʃo] の中間者に近いきらいがある。分布では一応対立を示しているものの、[s] と [ʃ] は、free – variation である可能性もあると我々はみている。

注9) というのは、我々は、琉球語と日本語の関係を、以下の図のように考えているからである。



注10) consonant の phonemic chart 図4で、枠内のものは、資料中に、minimalpairsが見出せず、はっきりした対立は証明できない。(つまり同じ phoneme とは言いきれない。) 一方、従来の日本語のかな表記の上では、区別せず、同じ phoneme としてみているものもあるため、(例、「じ」= [zi]、[ji]、「ず」= [dzu]、[zu]) ここでは推測にとどまっているものである。ただし、表記の音は必ずしも一致するものではないので、我々には、これらは別の phonemes として区別する方向をとっている。特に、今回の分析は我々自身で採集した資料に忠実に行なったので、『沖縄語辞典』の単語とも、食い違いが出てくる場合もある。我々が実際に収録したものを優先したこと、また、かなり問題点が残っているが、ここではこれ以上論ぜず、今後の調査で解明していくことを断わっておく。

注11) また、図5図6において、vowels の phonetic chart と phonemic chart が全く同じになっているが、これは、今回は、consonants に重点をおいて、vowels に関しては broad transcription (大まかな表記) した行なわなかったためと思われる。確かに収録中、[ʌ] と [ɯ] の様な、細かい違いにも気付くことはあったが、それが free variation か、あるいは complementary distribution をなしているかについては今回は論じない。

— 参 考 —

a .....2,009	a : .....349
i .....2,039	i : .....161
u .....2,065	u : .....136
e ..... 13	e : .....191
o ..... 0	o : .....116

「伊波普猷先生が20年前、その頃メソジスト派の宣教師として那覇効外に滞在していた宣教師シュワルツ氏の依頼を受けて、新約聖書の一部を、琉球語の標準とも言うべき首里方言に訳した“Mannual of Christion Workers”の中の母音統計による…」  
(『那覇方言概説』金城朝永より)

注12) 『沖縄語辞典』の phonetic transcription (音声表記) は、スモーレーのものではない。

注13) もっと精密に言うならば、Proto - Ryukyu - Japanese として考えるべきではないかと思う。それについては、注9を参照。

注14) /o・ttenso・n/ (青々している)

/tongaŋito・n/ (とがっている) など。

注15) この動詞の活用は、上述の「動詞の形態」では資料不足のためふれていない。

## 参 考 文 献

国立国語研究所編

1983年『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

中本正智

1981年『図説琉球語辞尻』金鶏社

中本正智

1976年『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局

金城朝永

1944年『那覇方言概説』三省堂

平山輝男、中本正智

1964年『昭和38年度研究成果刊行補助金による琉球語与那国方言の研究』東京堂

比嘉春潮、霧多正次、新里恵二

1963年『沖縄』岩波書店